

教師・富田博の戦中期から戦後期の教育観の変遷

加藤 理
(文教大学教育学部)

Transition of Educational Philosophy of Hiroshi Tomita the Teacher
from the Wartime to the Postwar Period

KATO OSAMU
(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

太平洋戦争中、教育勅語に則った皇国民錬成を行った国民学校の教師だった富田博は詳細な日記を残している。そこから、激動の時代を生きた教師の思想の変化を読み取ることができる。皇国民錬成を行った富田博は、戦中と戦後を教師としてどのように生きたのか、その思想と教育観の変遷について考察する。

はじめに

太平洋戦争中、教育勅語に則った皇国民錬成を行った国民学校の教師たちは、戦後は自身が行った教育を恥じ、あるいは否定し、慙愧に耐えられなくなった教師の中には、自ら教壇を去る者もいた。また、1945年（昭和20）10月30日に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が発した「教育関係者の資格についての指令」により、軍国主義・超国家主義を主張・推進した者、占領政策に対して積極的に反対する者を罷免する教職追放が要求されたことから、教員適格審査が行われ、一定数の教師が不適格と認められて教壇を去ることを余儀なくされた。

こうした激動の中、戦時中に宮城師範学校女子部附属国民学校で皇国民錬成を行った富田博は、戦中と戦後を教師としてどのように生きたのか、その思想と教育観の変遷について、富田が残した日記を中心に分析を行う。

1 富田の戦前の教育

富田博（1919-2014）は、1931年（昭和6）3月に仙台市立東六番丁小学校を卒業後、同

年4月宮城県仙台第一中学校入学、1936年（昭和11）3月宮城県仙台第一中学校を卒業して同年4月宮城県師範学校に入学している。1938年（昭和13）3月に師範学校を卒業後、宮城県遠田郡涌谷尋常高等小学校訓導、1940年（昭和15）4月宮城県仙台市立五橋高等小学校訓導を経て、1944年（昭和19）から宮城師範学校女子部附属国民学校訓導として終戦を迎えている。

富田は、師範学校時代の友人たちと、口演童話を中心とした児童文化研究のために、「話道研究会」を結成し、機関誌として『話道』を刊行している。『話道』第二巻第六号には、富田の戦前の教育観がよくわかるエッセイが掲載されている。そこには、次のような文章が記されている¹⁾。

今度の国民学校が従来の欧米教育法令依存を脱け切つて日本独自の立場による制度によつて教育する事となつたのは限りなく喜ばしい事であると共に責任の益々重大なのを感ずる。我國独自の立場から考へてそこに生れてくる指導理念は何かといへば、

教育ノ全般ニ亘リテ皇国ノ道ヲ修練セシメ
特ニ国体ニ對スル信念ヲ深カラシムルコト
である。児童を錬成してよい日本人を作り
上げるのである。即ち我が國家といふ立場
から教育する。

そして、次のような文章が記されていく²⁾。

國体に對する信念を深からしめ、皇運扶
翼の大精神を養ふことや没我奉公の至情を
養ふことが緊急不可缺の事であるが此等の
信念の涵養深化は純眞な児童の時代が最適
であり此の時代に養はれた此の信念は國民
の一生を通じての世界觀の基調をなすもの
である。

これらの記述から、教育勅語を信奉し、教育勅語に示された理念の実現を教師としての自己の使命と考えていたことが理解できる。

富田は、昭和19年のような欠落の年もあるものの、教師になった昭和13年からほぼ毎年詳細な日記を残している。1941年（昭和16）12月8日の太平洋戦争開戦日には、赤字で次のようなことを記している。

帝國、米英兩國に對し宣戰布告。詔勅渙發せらる。我陸海軍ハワイ、香港、シンガポール、ヒョリッピン、グアム等猛襲す。終日ニュースと軍歌がなりつゞけてある

この日から、連日のようにフィリピン上陸、イギリス軍戦艦撃沈などの戦果のニュースに対する感動と興奮が書き記されていくが、13日の日記には次のような教員たちの動向が記されている。

考查終了 二時より臨時教育大会 於東二校大勅奉読市長訓辞 会員演説行 隊伍を組んで桜ヶ丘大神宮に参拝 戦勝祈願をする。何が何で勝たねばならぬ。寒い吹曝しに立

つてゐても少しも寒さを感じぬ。太鼓の音にやらねばならぬといふ固い決心熱い涙が自と湧いてくるのを止得なかつた

仙台市の教育界挙げて戦勝祈願を行っている様子が記録されているが、こうした時代状況が教師と学校を覆っていたのである。

「不退轉 以和為貴（聖徳太子）承詔必謹 本年も童話報國に邁進せん 童話報國八年目」の巻頭言で始まる翌昭和17年元日を「決戦々捷下の新春を迎へる。然し更に数々の苦難の道に踏入り之を克報すべく今野君と元朝詣に出かける。塩釜神社、竹駒神社、岩沼の町の暖いこと。更に東一番丁の本願寺に参り護国の英靈に感謝する」と記述しているように、富田もこの時代状況の中に同化しながら教育を進めていく。

「神州不滅 和顔愛語 王土に生れて忠をいたし命を捨つるは人臣の道なり 正統記」の巻頭言で始まる昭和18年の日記には、子どもたちへの教育でも時局の影響が強くなっていく様子が記されている。1月26日は「六校時は南方作戦に空から参加した田中少佐殿のシンガポール攻撃の実戦談だ、非常に面白く有益に拝聴。やはり現地へ行かねば話は感銘がない」と、授業時間に軍人による戦争体験談があり、2月2日は「今日は防空練習の打合の為、授業不耗、二、三と訓練」と、学校での防空練習も始まっている。4月2日には「二男朝会后日之出へ陸軍諸兵募集の講演と映画会を見学に行く。映画は東洋の凱歌であつた」とあり、子どもたちの戦意昂揚を図り、軍隊への志願を促す取り組みも進められていく。

「ガダルカナル島に戦歿された英靈の氏名が発表される。本県のみ概数2500人。師範後輩の人達18名を算する。一同して黙禱する。後藤八重子の兄克己中尉戦死されたので夜母と共にお悔みに行く。我等奮然此の仇をとらんのみ」（7月6日）と、富田の関係者の戦死も増えていく中で、「午後の空き時間は日録

書き及出征軍人表作り。古木海軍受験するも視力にて落つ残念なり」(9月3日)と、秋になるとクラスの子どもたちから志願兵が増えていく。

こうした中、「満州事変記念日 7.00集合靖国神社参拝の為早出。ぼつぼつ雨がくる。参拝後映画見学 文化及日の出にて決戦の大空へを見る。土浦航空隊を精細に描いて良い映画だ。随分児童達には刺激になつた事だらう」(9月18日)、「修身、二三四と連続して図画考査。映画海軍をテーマとして書かせる。相当の作ができる」(12月16日)の記述に見られるような教育がすすめられていく。戦時下の国民学校訓導に期待されていた教育を富田は推進したのである。

2 戦時中の富田の思想

富田は、戦時下でも映画鑑賞を欠かさなかった。昭和18年の各月に鑑賞した映画を日記巻末の「備忘録」から引用する。

- 1月 磯川兵助功名噺
- 3月 航空戦記、音楽大進軍、姿三四郎、戦ふ護送船団、桃太郎の海鷲
- 4月 兵六夢物語、望楼の決死隊
- 5月 シンガポール総攻撃、海軍戦記
- 6月 マライの虎、風雪の春、暖き風
- 7月 大陸新戦場、決闘般若坂、潜水艦西へ、花咲く港、我が家の風
- 8月 をぢさん
- 9月 世界に告ぐ、急降下爆撃隊、奴隷船、愛機南へ飛ぶ、決戦の大空へ
- 10月 富士に誓ふ、熱風、無法松の一生
- 12月 出征前十二時間、海軍、海賊旗吹ツ飛ぶ

鑑賞した映画は、時局に関連した戦意高揚をねらった作品が多いが、『花咲く港』や『無法松の一生』のような映画史に残る名画も見ている。「日の出で花咲く港を見る。面白い映画だ。あくどい笑ひでないのが良い」

(7月29日)、「雨の中を日の出へ無法松の一生を見に行く。阪妻の表情は入神だ」(10月30日)といった感想を持つ一方で、「文化で愛機南へ飛ぶの試写会。相馬先生と同行する。予期した通り大したものではない」(9月2日)、「一時間授業後東宝へ富士に誓ふを見学に行く。朝駅まで少年飛行兵を送りに二男の先生方行つて残るは俺一人だつた。11.10映画終了。海軍ものに見る様な深い感激は見られなかった。」(10月14日)といった感想にみられるように、戦意高揚の国策映画を無批判に感動して見たわけではなく、作品に対する確かな鑑賞眼と批判的な目を保持していたことがわかる。国策を妄信することなく、冷静に時局を見つめながら、自身の考えを確立しようとしていたのである。

読んでいた本も、富田の思想を知る手がかりとなる。富田は戦時下でも旺盛な読書欲と勉学意欲の中で、物流が乏しくなる中でも書籍を求めて読書している。富田の昭和18年の日記の巻末には、年間の収入と支出がまとめられているが、総支出1244円82銭のうち、書籍代は271円73銭を占めている。実に、支出の6分の1以上を書籍代に充てていたのである。

「最近読んだ良書」として、巻末に『朗詠十二月』『次郎物語』『続次郎物語』『御民われ』『海軍』『海戦』『神皇正統記』『平田篤胤』などを挙げているが、昭和18年の日記に「王土に生れて忠をいたし命を捨つるは人臣の道なり」という『神皇正統記』の一節を書き記したことから、『神皇正統記』から強い影響を受けた様子がうかがえる。

富田は、「今日より神皇正統記読初む」と昭和18年元日から『神皇正統記』を読み始める。4日には「朝食後直ちに神皇正統記を読み出す。難しい内容を平易に然も単なる語釈に陥らざる山田博士の述義はぐんぐん惹きつけられる。良書とやいはん。夕食までがつちり読み應神天皇の御代まで至る」と記し、9日は「夜頭痛するも9.00まで正統記研究。

9.30就寝する」と読み進め、「5.30帰宅。神皇正統記を読む。あと一息で読了だ」と12日に記し、13日に次の記述を残している。

夜神皇正統記を読了。親房卿の烈々たる信念、國体に對する觀念、最後に到つて一層激しいものがある。感銘深し。

引続いて今日から古今和歌集評釈を読み初千頁以上の大部だが馬力をかけて読まうと思ふ。

わずか2週間で一気に読了し、北畠親房の思想・信念に深く感銘を受けたことが書かれているが、『神皇正統記』はこの時期の富田の思想の骨格となっていた。『神皇正統記』だけでなく、このころの富田は、日本の古典文学やその研究書を多数耽読している。

昭和18年の日記には、この年に購入して読んだ古典文学関係の書籍として、『徒然草』『宇治拾遺物語』『古事記』『大鏡』『水鏡』『増鏡』が記されている。また、古典の研究書、解説書、日本研究の書として、『古典の精神』『記紀論究』『日本精神研究』『萬葉集序説』『日本精神歌集』『国民教育と敬神』『国土の精神』『古代文学講話』『万葉辞典』『神武天皇の御東征物語』『万葉集講話』『万葉集の鑑賞と批評』『古事記概説』『日本神話傳節の研究』『旅人と憶良』『芭蕉』『神武天皇の御東征』『大楠公と恩師瀧覚坊』『本居宣長』『万葉集と忠君愛國』を挙げている。この中の『大楠公と恩師瀧覚坊』は、「忠魂と師魂」の副題がつけられた書で、師と仰いだ久留島武彦の著書である。

学校では『万葉集』の中にある防人の歌を子どもたちに教えたり、『増鏡』に描かれた皇室崇拜の思想が教育現場で尊重されたりした時代だった。古典に回帰して日本精神のすばらしさを唱える時代風潮ではあったが、富田は国学者でもあるかのように、古典とその研究書を耽読し、「日本」について探求しよ

うとしていた様子が理解できる。日本とは何か、日本人とは何か、そして日本における教育はどうあるべきか、富田は真剣に自己の思想の確立を求めていたのである。

3 戦後の富田の動向

「日本」を探求していた富田は、昭和20年8月15日を次のように記している。

八月十五日（水）晴 正午畏くも
天皇陛下御自ら御放送遊ばさる
天裂け地砕るとも神州不犯を信じてみたの
に一
皇師千萬鎗を撫し機を待ち居りしを一
国民一億玉砕突撃を期したるに一
—今や言葉なし。大御言下る
されど、されど、悲痛極りなし
などは死ねとの御こと下らざりしや
生きも死にもたゞに御言のままなれど
玉と砕けむすべならなくに
山を抜き世を覆ふ力そこひなく
ありあるものを大みことはや
涙涙 とどめもあへず ふきもあへず

この日を境に、世の中は急転換していく。教育の世界も、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）から発せられる指令によって、急速に民主化が進められていく。価値観や信ずべきものが180度変わっていく激動の時代の中で、教師たちは自身の生き方の選択を迫られていく。

そうした中で、自ら教師を辞した人がいたことは、さまざまな記録に残されている。

元宮城県白石市長の川井貞一は、父親の源治郎が敗戦の年に青年学校長を辞職した理由を父親に聞いた時のことを次のように回想している³⁾。

「あのなあ、貞一、当時の高等科（小学校）の教頭とか青年学校の校長というのは、

予科練や滿蒙義勇軍に生徒達を送り出すのが仕事さ。それで泣きながら志望を拒む親たちを説得し、お国のためだと言って何十人、何百人の生徒達を戦場に、あるいは満州（現在の中国東北部）に送り出した。ことに満州に送り出してやった生徒達はほとんど帰って来なかった。そして敗戦。教育の方針が百八十度転換した。今まで悪と言われていたことが正しいことになり、今まで正しいと教えてきたことが間違っていたという教育をしなければならなかった。そう思って商人になった。おれが国を盲信し、無理矢理満州に送ってやって、あそこの土と化した犠牲者への鎮魂の気持ちだ」

川井のような選択をした教師が、終戦直後の教師の姿としてこれまで多く語られてきたが、自己否定と償いの形は、教師を辞めるという選択だけではなかった。港区の愛高国民学校訓導として終戦を迎えた金沢嘉市は、同僚の丹葉節郎がこれからの教壇に立つことはできないと教師を辞職することを告げに来たことを受けて、次のように述べている⁴⁾。

それは丹葉氏だけの問題ではない。私の問題でもあった。

「鬼畜米英」も教えた。「打ちてしやまん」ともおしえた。「大君のへにこそ死なめ」ともおしえた。そして卒業生たちには出征のたびに激励のことばも送った。その私がどのつらさげて再び子どもたちの前に立つことができようか。政府の指導者は大いなる誤算であったとすましていられるかも知れないが、一人一人の魂に接していく教師、人間の真実に迫っていく教育、つねに真理を真理として教えていく教師が、今までのことはまちがいであったと簡単に言うことは道義的にはできないのである。それが純真な子どもであればある程人間としての責任の深さに思い悩んだ。

思い悩みながらも、教師という好きな仕事から去りたくないという気持ちと、辞めた後の生活への不安などを考えて思い悩んでいた金沢は、「戦死した教え子や友人たちのことを思うと、このままでいてはいけない。なんとかしなくてはならない。彼らの死をむだにすることはならない。ふたたびあやまちを繰り返してはならない。敗戦によって一度は死んだも同然の自分であると思えばなんでもできるはずである」⁵⁾ と言いつけさせるようにして、責任を償うためにも教師を続ける道を選ぶことになる。

戦後の新しい教育への賛同から、積極的に教師を続ける道を選ぶ者もいた。埼玉県田面沢国民学校高等科訓導として終戦を迎えた荻野末は、憲法に輝かしい未来を感じ、「新教育指針」に大きな驚きを感じて教師を続ける意欲を掻き立てていく⁶⁾。

そのころ、友人のひとりがあそびにきて「新教育指針」というものをみせてくれて、わたしはその内容に目をとおしてびっくりしました。「はしがき」にこうかいてありました。「この指針は、教育者におしつけるものではない、教科書としておぼえる必要もなく、これを手がかりとして、自由に考え、批判しつつ、自ら新教育の目あてをとらえ、重点と方法を工夫し」、「教育者が自主的に、自ら考える」などとあって、ながくとじこめられていた日本の教師の、あこがれ、ひそかに期待していたものが、ことばを獲得してぱっと日の光のなかにおどりだしたようなまぶしい感動をもちました。

わたしのなかに、学校へかえりたい、学校へかえってあれもこれもやりなおしたいといふ欲求が、つよく波打ってくるのをおぼえました。

「新教育指針」は、昭和21年5月15日から、昭和22年2月15日まで、文部省が4分冊に分

けて発表した教師のための手引書である。荻野は戦前の自分の教育を否定する気持ちと、「新教育指針」に示された教育に身を投じて教師としてやりなおしたいという意志との相剋の果てに、新教育に身を投じることで、新しい教育に進進すると同時に戦前の自分の誤った教育への償いしようとしたのである。

ただし、教師を続ける意思を持った者全員が教師を続けることができたわけではない。教職員適格審査によって適格と判定される必要があった。適格審査は、昭和20年10月30日に「教員及び教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」として占領軍から出された覚書に基づき進められた。

宮城県では昭和21年7月に「宮城県教員適格審査委員会」が設けられ、21年10月末までかかって8970名の審査を完了する。その結果は、不適格2、保留86で、適格と判定されたものは8882名だった。その他、提出された書類により追放された者14、審査をうけずに退職した者835名で、不適格と認められた者は851名であった⁷⁾。

昭和21年6月26日の日記に「午前午後には亘り教員適格審査報告書かきの要領説明」との記述があるが、富田は提出した書類を厳しく精査された1人であった。「審査には何ヶ月もかかりました。わたしは一番最後の審査で助かったのです」と富田は述べている⁸⁾。その理由として、ラジオ放送「林子平」の最後で、「今こそ米英を撃ち滅ぼし…」と話したことと、菊地勝之助宮城県図書館長からの依頼で、特攻隊で戦死して二階級特進した鈴木三守中佐の遺族に聞き取りをして放送台本にしたことではないか、と述べている⁹⁾。

戦中期の富田の活動を調べていると、「林子平」以上に、菊地館長から依頼された軍神顕彰の仕事が、適格審査にあたり念入りに精査されたものと思われる。依頼の経緯について、日記の昭和20年5月8日に「昨日、菊地図書館長来り、若桜會の顕彰誌編纂の委員に

横沢先生に共にたのみたいとの話ありし由。感激しておうけする」と記されている。翌9日には、「図書館長より今日三時から護国神社へ集つて、若桜會の特攻勇士忠魂録編纂の第一回委員会。先づ神前に額づいてこの聖業に身心を打こむことを誓ひ申しあげる。なかなか忙しくもあり困難なる事業でもあらうが国家の為献身的に仕事をしたいと思ふ。七北田、高砂、鹿島台の軍神を訪問する事となる」と記されている。16日には、「二時半より忠魂録編纂委員会が図書館である。具体的な打合せ。肩書きは若桜會編纂委員といふ名。遺品もおかりして帰る。責任がぐつと加はった感じ。出張は四人で出ることになったので二日目高砂の三浦軍神。二四日七北田の大平軍神。二六日石巻の勝又軍神。二七日鹿島台の佐々木軍神。六月三、四、五日鈴木三守、移川晋一両軍神を訪問することとなった。」この後、遺族宅を訪問したり、編集打合せを繰り返したり、原稿執筆をしたりしながら、「海の若桜」の放送は7月4日、「陸の若桜」は終戦間際の8月8日に放送される。終戦後の9月6日に若桜會解散式があり、9月12日に、若桜會の謝礼として150円受け取っている。

戦争末期に与えられて、国家のためにと意気込んで没入した若桜會の仕事が、適格審査に際して問題視されたのであろう。富田の審査結果は昭和22年2月4日付で出され、3月11日に富田の手元に届いている。

帰宅すれば宮城県より次の如き至急親展書来てゐる

第九八〇六号

判定書

住所 仙台市小田原車通り三

職名 文部教官（宮城師範）

氏名 富田 博

大正八年三月十一日生

右の者は昭和二十一年勅令第二百六十三

号の規定によつて提出した書面を審査したところ昭和二十年十月二十二日附聯合國軍最高司令官覚書日本教育制度ニ関スル管理政策、同月三十日附同教員関係官ノ調査除外認可ニ関スル件及昭和二十一年四月附同公務従事ニ適セザル者ノ公職ヨリ除去ニ関スル件に掲げてある條項に当らない者であると判定する

昭和二十二年二月四日

宮城縣適格審査委員長 宮城音五郎^印

備考

この判定書は本人の提出したところの昭和二十一年勅令第二百六十三号の規定による書面にいつわりのことを書いてあつたり又は書かねばならないことを書いてなかつたときは其の効力はない

審査に通つたことを学校長から告げられた時のことを、「ほっとしました」と回想している¹⁰⁾。この言葉から、富田は戦後も教師を続けたいという強い意志を持っていたことが確認できる。

富田が、戦時中の自己をどのように総括したのか、明確な記述はない。残されたいいくつかの資料から、戦後の教育に富田がどのような考えで向き合っていたのか分析することから、戦前の自己の教育への思いを考察していくしかない。ともあれ、富田は精力的に戦後教育を推進していくことになる。

4 富田の戦後の教育観と教育

昭和20年終戦後から年末までの富田の教師としての活動と学校の動向は、「教師・富田博の終戦後の心情と民主教育への動きの分析—戦後の児童文化復興期における教師の関り②—」(文教大学「教育学部紀要」第58号)にまとめた。教育の民主化が急速に進められ、その中で富田も自己の教育観の再構築に熱意をもって取り組んでいる様子を確認した。

昭和20年10月12日の日記に、「一方共産党員は釈放されてすぐ演説會を開き天皇制の打倒なくして真の日本なし、といふ様な暴虐無残な言を吐いて居るこんな奴らは一そ殺してしまへばよかつたのに。教育者の大異動もあるといふ世相將に混沌として尽くる所を知らざるなり教員修練として細谷教授の第二講、史観の問題につき話あり。感銘ふかし」と、富田の思想を知るうえで貴重な記述がある。

この記述から、富田は「真の日本」とつて天皇制は必要だと考えていたことがわかる。また、東北大学初代教育学部長で、教育哲学者細谷恒夫の講義に深い感銘を受けていることから、歴史を俯瞰した中で民主教育への理解を深めていたことも感じられる。

富田の教育観と思想形成を知るために、昭和20年終戦後と昭和21年の読書を確認する。終戦後、昭和20年のうちは戦後の混乱が続く中、本の購入もままならず、思うような読書はできていない。終戦直後の8月18日に『宮本武蔵』を読み、23日に椋鳩十を読んでいるが、終戦による虚脱感を埋めるように活字を追っていたのではないだろうか。活字への渴望は強く、「マツヲに行くも何もなく、藤崎、丸善、スガヤを廻り現代一冊入手」(8月29日)と空襲による焼け跡の中で書店巡りをしている。

10月5日にパールバックを読み、11月8日に西洋史を開き、11月18日に英字新聞を読んだことが記されているが、急激に転換していく社会の中で、占領下の社会への適応の速さは注目に値する。また、11月8日に教育辞典を開き、12月29日に「マツヲへ寄つて日本教育他を求めて帰る」という記述から、終戦に際して、教師を辞めるかどうか葛藤があった様子は見られない。むしろ、積極的に終戦後の教育を考え、新しい教育を知ろうと努力していた様子がうかがえる。

昭和21年の読書の記録は、富田の教育観と思想の変化をよく物語るものとなっている。1月22日には「宝文堂とマツヲに行き改造・

文春・待望の世界などを求む」と記述しているが、『世界』や『改造』『中央公論』などの雑誌購入を精力的に行っている。また、「新美南吉「花の木むらと盗人たち」良い童話集だ」（5月8日）、「帰途友文堂で小波童話名作集を見つけこをどりして求めて帰る。」（6月22日）のように、童話関係の書籍の購入と読書も多い。

教育観や思想形成に関係していると思われる読書に関する記述を引用して表にまとめる。

1/22	宝文堂とマツヲに行き改造・文春・待望の世界などを求む。流石に岩波の出版だけあつて印刷といひ編輯といひ執筆陣といひ堂々たるものだ。大部よむものがたまつて来た。馬力を出してよまねばならぬ。この頃は讀んでも片はしか忘れて記憶できぬ。記憶できても整理してまとめられぬ。それよりも第一に考へる時間がない。時間はあつてもゆつくり落ちついて考へるといふ心のゆとりがない。之は悲しいことだ。もつと〜考へねばならぬ。
3/4	午後教育技術論をよみ夕方床屋に行く。髪は伸ばすことにする。夜教育文化など読む
3/10	余はどこにも出ずゆつくりと読書に耽ける。人間二月号のプラグマティズムと人間の教育（宮原誠一）はいふ論文だ
4/7	昼食後マツヲへ行く。教科書のこと、山口書店が配給をうけたといふから安心する。岩波「国家に於ける文化と教育」欲しくて注文する（中略）今日潮流・読書新聞来る
5/1	玉川学園と中和書院へデューイ教育の注文書を出す
5/11	教育文化、日本教育などを求めて帰る
5/13	マツヲと丸善で教育関係雑誌を求む。随分出たものだ
5/25	午後篠原氏の批判的教育学をよみ出す。夜、児童詩をよむ。
6/11	マツヲで国民教育など求めて帰る
6/17	天野貞祐著「道理の感覚」久々にじつくりと落着いて読み得たり
6/23	昼食後出かけて友文堂で<学問のすゝめ>をマツヲでルソーの人生哲学、〇〇〇、教育公論、女性〇、主フの友を求めて帝大へ

7/6	金港堂、マツヲを廻つて農村児童の心理他を求む
7/12	帰途高山と宝文堂に廻つて文庫（トムソーヤー冒険）戦中戦後小川の葦、教育技術等求めて帰る。大収穫であつた
7/19	文芸講座に行かず午前中国語教育論と学習原論をよむ午後は雑誌、随筆、童話をよむ。夕方今野先生見舞ひに。健康で出勤されてゐるとのこと。安心する。友文堂でフレンドその他求めて帰る
7/20	文芸講座は今日もサボつてしまふ。その代り午前中みつしりと国語教育論をよむ。
7/27	登校前マツヲへ世界、展望、主婦、教育雑誌
8/1	午後は学習原論をよみ夕方薪わりをする
8/2	午前午後学習原論をよむ約一五〇頁
9/3	教育論文の索引を作る

昭和22年3月31日には、「赤井米吉「学校教育の民主化」読了良い本だ。若い人たちに是非よませたい」という記述もある。赤井米吉は、子どもの内発的な動機を大切にしたい大正自由教育運動の中で自由教育を展開したが、読書内容を見ると、富田は大正自由教育と戦後教育の思想的基盤となったJ. デューイの教育に共鳴しながら教育実践を行ったことが理解できる。昭和21年の日記から、富田の教育実践に関する主な記述を抜き出してみる。

1/13	すぐ宮城女学校へ駆つけて国文学部會へ。會食しながら今後の方針を定む。来月は菊沢氏より言語とデモクラシーを聞くことにする。
1/16	十一時より教官會議。部長、舎監長の話午後は今後の教育について意見を交換し合ふ
1/25	一時から五橋で講談會があるので出席。期せずして山本、佐々木、東岩井、安達とオンツアン達の顔合せ。新明教授の民主主義と教育の話。終つて座談會
2/15	細谷教授との坐談會—世界のデューイの実験報告を中心に—
3/6	午前中主事先生よりデューイの教育等について講義、誠にいふ話であつた。

3/14	午後は全教生を作法室に集めて新教育講習會。横沢、小金沢加藤、鎌田、富田といろいろの角度より話す。
4/17	六時間目まで子供達とがつちり組む。目に見ゆる所は遅いが然し次第に一步々々進んで行く。強権圧制、個性を殺さぬ様と細心の注意だ
4/19	個性をのばし民主的教育をしようとする。気永にゆつくりせねばならぬので、学科が殆んど進まぬのには困る。村本の親より通信あり。午後文化部打合、つゞいて細谷教授の講話。いゝ話だったが終り頃より腹痛甚しく帰宅す
4/20	二校時理科。主要教科を遅らせぬやう然も自主的にするやうとすると苦心が多い。
5/ 8	体力測定をする。小雨の中だが子供達は元気だった。受持つて一月になるが、どんなにかはつたらうか。子供の自覚を尊重したらうか。ちつくり落着いて考へ、実行する子供にしたであらうか…附属教官として恥かしくないだらうか
5/ 9	着々と児童を整備しつゝあることは楽しい。たゞ学科がぐんと遅れる。こんなこと気にかけては駄目なのだが…
5/10	いよいよ児童軌道にのつてくる。もう一息なり
5/11	学級内の自治組織を作る。授業はできぬが児童達に自主性をもたせる為だからと思ふ。午後二時まで児童と計劃
5/20	今日も授業できず。あせる。うんと授業を中心にすればいゝのか児童の性格淘汰を中心にすればいゝのか。
6/11	午後五橋へ小原罔芳先生の講演をききに行く
7/12	授業は今日だけ。考査と文化活動で終る。何とか自主活動を高めたい。附属に居て出来ぬ筈はない。やはり教師の問題か？もつと興味をもたす様に仕向けねばならぬ。
8/10	午後細谷教授の講義、四時より此間の講習の慰労會食。帰宅五時
9/ 4	交友調査。夏休課題展及発表會。発表訓練自主積極さをうんとつけねばならぬ。
9/ 4	午後細谷先生を囲み個性教育座談會
9/ 8	午前中一ぱい教室で仕事。もつと學級経営に努力をせねばならぬ

戦後の新教育を推進することを求めて、日々奮闘していることが記述されている。子どもたちの個性を伸ばし、自主性を大事にしようとしていることが繰り返し記述されている。学級経営に力を注いでいることも記述されている。その一方で、「うんと授業を中心にすればいゝのか児童の性格淘汰を中心にすればいゝのか」（5月20日）と、旧来の教師による知識注入の一斉授業と、戦後教育の中で模索されている児童中心の自主的な学びを通じた人間形成重視の教育との間で、自身の教育観にまだ迷いがある様子も記されている。

そして、自身の課題として、「鎌田君学校改造について意見をもつて居るらしい。中々深く考へてゐる。俺もやらうとは思ふが、他人と比べて對外的な事に力をさかれるのでどうも専一になり切れぬ。勉強→思索→実践。先師も訪ぬべし。読書もすべし。而して最も足らざるもの之思索なり。深く省るべきことなり」（2月12日）と、思索不足を課題として挙げている。

新しい教育を求めて読書し、自己の教育観の確立に努め、教育実践に反映させようとするものの、理想と現実のギャップにいら立ちを覚えている様子も日記に残されている。昭和22年4月5日には、「午前中読書するがやはり落ついて一冊の本をよみきれない。神経衰弱だらうか。沢山沢山よまねばならぬのに。無系統によむから知識がこんぐらかるのか。原稿を書かうとしても想がまとまらない。カマラードにと思つても書くべきものがない。不勉強のためか！一年間何をしたのか少しも足跡が残つてゐない。基礎となる知識も全くない。昔の教国や教論を出してきて刺激を求める。断片的なものだけでは心が休まらない。不安焦慮腹立ち。どれもこれもみなムダで血にも肉にもなつてゐないやうにしか思えぬ。ああ！」と自身の現実に対する焦燥感を吐露している。

1947年（昭和22）は教育基本法が制定され、

戦後の新教育がスタートするが、新年度初日の4月1日に、富田は日記に次のような決意を記している。

四月かなと思ふ。本年度こそ学級経営も
教生指導も研究もうんとやらうと思ふ何
よりも先づその日その日の精細な記録を
とつていかねばと思ふ。昔よんだ教育国
語教育や教室などを持ち出してよんでみ
る。東井義雄氏の読めず書けぬ子の記録
と寒川道夫氏の郊外生活の指導と子供○
會をよみ今更ながら一昔前の教師の献身
的な努力と研究に大きな刺激をうける。
学校の教育を進める為二人のとつた社
会生活の指導がどんなに烈しいものであ
つたか…やらねばならぬ！

保険や来る。(三木清) 人生論ノート到着
教育叢書 安藤正次国語国字問題読了
人民戦線合併号通読

富田は、教師として学校教育を進めるためにも、子どもたちの生活指導に注力する決意を固めたことが記されている。

生活苦のために心まで貧しくなっていく村の子たちの現状を憂い、子どもたちに希望と勇気をもたせる教育に力を注ぎ、生活綴り方教育の実践をまとめて『村を育てる学力』を出版した東井義雄と、生活綴り方教育の実践を行い、『山芋』の作者大関松三郎を指導した寒川道夫の著作を読み返しなが、新教育のスタートにあたって教師としての進むべき道確かめているのである。4月7日には、次のようなことも記している。

カマラード十号の道太氏の新しき文化の
進め方をよみ深く心を打たれる。生活の凡
ゆる場所に自分の命を打込める仕事を見出
していく彼の情熱。それが表だけの軽薄な
ものでなく真底から國を愛し文化を憶ふ者
として、人々の生活を再建させていくその

逞しい実践力。

貧しい田舎の子供たちにのみ生活教育はあるのではない。浮浪児のうろつく街の子供のみ生活指導が必要なのではない。それは恰度二宮金次郎にだけ孝行ができると思ふやうなものである。附属の子供にはどんな生活指導をすればいゝのか、ちつくりと考へてみなくてはと思う。文化斗争の必要から考へて自分の生活を再建してみなければならぬ。こんなことを考へてゐる中教官室の時計が十時半を打つた。春の夜はあたくかい。ヒーターを前にスプリングの上にとてらを着込んだ体はじつとりと汗ばんできた。もう寝るとしよう

宿直室で生活綴り方教育を実践した鈴木道太の著作を読んで深く心を打たれながら、「真底から國を愛し文化を憶ふ者として、人々の生活を再建」する姿に、自己のこれからの為すべきことを重ね合わせて考へたことが記されている。

富田は、以上のような読書と思索と実践の中で、教師として子どもたちと教室で向き合うだけでなく、子どもたちの生活再建と生活教育を自身がなすべきこととする考へを固めていったのである。

おわりに

富田は昭和21年3月18日から19日に宮城県北部の豊里町(現登米市)に出張するが、その機会に考へたことを「豊里紀行随想」と題して日記に書き記している。富田の思想を知ることができる箇所を引用する。

- 自己の思想に軸のなかつたこと。(鎌田氏いふ)俺には未だ自信がない。再び三度世相が変轉し、共産主義、軍国主義となつた際に敢然として日本的自由主義を守りきれるか—
- 日本といふ軸を確立すれば六角柱、八角

- 柱のいろいろの面が表れてもよいと思ふ。
- 「日本」といふ漠然とした中心では、それは卑怯な逃げである。もつと「日本」の實體を掘り下げねばならぬ。
 - 敗戦の原因として…あげられる、軍閥財閥が盲信したその原因はどこにあつたかを突きとめねばならない。
 - とかく日本人は自己のよき所のみ大きく見、欠点短所には目を蔽ふ。他人の時には全く反対。他人の長所を伸ばさずにその芽をつみとる事さへ多かつたのではないか。
 - 斯く考へ来ると、根本は日本国民性の改造といふ点にまで及ばねばとても民主化は不可能ではなからうかと考へられる。
- (中略)
- 旅はよきかな。人を知り土地を知り、そして、季節を知ることが出来る。
- 春はもう訪れようとしてゐる。雨がほそい。—

富田がどのような思想を形成していたか伝えてくれる記述である。富田は、共産主義と軍国主義を明確に否定している。一方で、「日本」を軸にした「日本的自由主義」を自己の思想として確立しようとしている。この段階では、まだ「日本的自由主義」の確立には至っていないが、「日本」とはどのような国なのか、その実態を掘り下げようとしている。富田は、戦時中も記紀万葉集などの古典から「日本」を知ろうとしていたが、戦時中から戦後まで、一貫して富田は「日本」を深く知ろうとしていたのである。

また、民主化の実現のために国民性の改造が必要だと述べているが、ここまでの日記などの分析から、教師・富田博は、教育を通して国民性の改造を行おうとしたことが理解できる。戦前に生活綴り方教育を行った東井義雄や寒川道夫、そして鈴木道太らの実践を、生活再建と国民性の改造を行う上で参考にす

べき実践として富田はその力に刮目している。

多くの生活綴り方教師たちは社会主義思想を持ち、その点で、共産主義を否定し、皇室を崇拝する富田とは相いれない。昭和21年3月6日に「登校して地久節と知る。国民?と一瞬顔がほてる。然しどの新聞を見ても少しもこの事にふれてゐない。時勢とはいへ全く悲しいことだ。然し国民自体、俺自体がこんなざまだから…」とあるが、皇后誕生日の地久節を忘れたかのような社会を嘆いていることから、富田の皇室崇拝の思いはうかがえる。

富田が生活綴り方教師たちを参考にしたのは、作文や詩を書かせて生活の再建と生活指導を目指すその教育方法の面のみであったことは、富田の教育思想と実践を考える上でのポイントとなろう。

そして、生活綴り方教師たちが作文や詩を書かせることを実践の中心にしたことにたいして、富田は童話と童謡、児童演劇を通して子どもたちの生活を豊かにすることを目指していく。戦後、国語教育の他に児童文化を自身の軸とした富田の教育観と教育思想は、ここまで見てきた経緯の中で形成されていった。教師を辞めるという選択をせず、国語教育と児童文化活動に邁進した理由は、自身の教育によって、子どもたちの生活を豊かにすることが戦前の自身の活動への償いと考えたためでもあろう。

富田が行った児童文化活動については、別稿で詳述する。

【注】

- 1) 富田弘志「童話の新使命」『話道』第二卷第六号 1940年 仙臺話道研究会 二ページ
- 2) 同前
- 3) 川井貞一「重き荷を背負う人たち」『みやぎ憲法ブックレットNo.4 語りつぐ「私の戦争体験」 みやぎ憲法九条の会 2008年 4ページ

- 4) 金沢嘉市『ある小学校長の回想』 岩波書店 1967年 44ページ
- 5) 前掲『ある小学校長の回想』 45ページ
- 6) 荻野末『ある教師の昭和史』 一ツ橋書房 1970年 109ページ
- 7) 『宮城県教育百年史』 第三巻 宮城県教育委員会 1975年 89ページ
- 8) 鈴木楫吉・加藤理編『富田博が語る みやぎの児童文化と国語教育の軌跡』 おてんとさんの会 2010年 31ページ
- 9) 前掲『富田博が語る みやぎの児童文化と国語教育の軌跡』 30～31ページ
- 10) 前掲『富田博が語る みやぎの児童文化と国語教育の軌跡』 31ページ